

## 紀行文 知覧特攻平和会館を訪ねて

二〇〇七年二月。まだ凍てつく十勝をあとに、妻と一緒に、某旅行会社の九州一周旅行へ出発した。季節はずれの霧の深い朝で、とちち帯広空港に着くと、同じ旅行先の釧路空港からのメンバーが霧で欠航になりそうとの添乗員の話があった。帯広からは我々の他に二組の夫婦と三人組のメンバー合計九人が一緒に行動することになった。

在職中は、ツアー旅行も思うに任せず、今回が初めての旅行である。何よりもパッケージツアーは料金が安く、宿泊・移動など全く考えなくてもセットされていることである。妻も初めての九州旅行で、セットされた観光地や宿泊ホテルを楽しみにしていた。

羽田で乗り継ぎ福岡に到着したのは、午後3時過ぎで、釧路からのメンバーの一部は帯広空港へ移動して、後便で到着することであった。

こうして九州旅行が始まったのであるが、二日目は別府、湯布院、阿蘇、高千穂峠を経て、宮崎に宿泊。三日目は日南海岸、青島神社、鶴戸神宮

、飫肥城を見学して霧島温泉へ。四日目は桜島から錦江湾をフェリーで乗り継ぎ鹿児島を経由して指宿へと一路南下するのであるが、鹿児島から高速道路で知覧へと進み、ここで四日目の最後の見学場所である知覧特攻平和会館を見学する。平和会館見学の途中、知覧観光として武家屋敷とホテル館いずれかを自由時間で見学することになった。我々は迷わずホテル館を訪問することとした。

ホテル館とはご存じの方も多いと思うが、特攻の母として慕われた鳥浜トメさんの富屋食堂が資料館に改装されたものである。新潟出身の宮川三郎さん(二〇歳)が特攻の前日、トメさんに「明日、特攻が成功したらホテルになつて帰ってくるよ」と言い残して出撃していった。その翌日一匹の大きな源氏ボタルが店の中に入ってきた。それに気づいた皆は「宮川さんだ。宮川さんが帰ってきたんだ」と感動したという話が元になっている。

このエピソードは、高倉健主演の「ホテル」で映画化されている。また、折しも石原慎太郎氏が脚本を書き、製作総指揮を執った「俺は、君のためにこそ死ににいく」の映画がクラシックアップし、五月にロードショウの予定という時期

でもあった。そのため、一度この資料館を見学してみたいという気持ちが強かった。

東海大学の鳥飼行博研究室ホームページによると一九四一年十二月の太平洋戦争開戦直後に陸軍飛行学校の知覧分教所が開校され、一九四二年には学徒出身の特別操縦見習士を含む操縦訓練学校となったという。一九四三年には特別操縦見習士官制度が創設され、航空機搭乗員を急速養成するために、師範学校、専門学校、高校、大学に在学した者を入隊させ、曹長の階級を与え幹部候補とした。「特操一期生史」によると、合計四期の特操入隊者八千人。一期生任官者二三八六人のうち、六六八人が特攻などで戦死。とある。

一七、八歳の若い学徒を、幹部候補という名のもとに召集し、特別攻撃ではなく、まさに自爆攻撃を命ずる状況を冷静に判断すれば、太平洋戦争の終結を、勇気をもって決断すべき時であつたと思う。どの遺書を読んでも、敵艦を轟沈させる意思ばかりが書かれている。ここは資料の撮影が禁止されているので詳しくは記載できないが、鳥飼先生はこゝも紹介している。「死ぬ運

命にある特攻隊員たちは、何も恐れることなく、心のうちを全てさらけ出したと単純に割り切ることはできない。大切な家族、友人たちに、一切の迷惑、心配をかけてはいけない。彼らを悲しませ、失望させるわけにはいかない。このように熟考した真摯な特攻隊員たちは、家族、友人が、遺書の行間に思い汲み取ってくれることを切に願つたであろう。」

上原少尉は

「おばちゃん、日本は負けるよ」

「そげんこというと憲兵隊につかまるよ！」

と心配したという。本心を表明することさえできなかった戦時の状況について、遺書の潔い文面よりも、その背景を読み取ることが、我々に課せられた課題のように思えた。

ホテル館の見学に続いて知覧の特攻平和会館を見学した。こちらには、戦闘服や遺品、戦闘機、特攻を任命された隊員の宿舎である三角兵舎などがあつて当時を知る貴重なものとなっている。

私は一九四二年生まれであるから、まさに戦時下に生れ終戦は三歳であつ

た。空襲や防空壕へ逃げ込んだことなど、おぼろげに記憶している。戦後、所謂大和魂という潔さが日本人特有の気質のように言われることがあった。しかし、本来の大和魂は他人を思いやる、痛みを分かち合う、辛苦に耐えて生きる、犠牲的精神といった気質が底流にある。特に二〇〇一年の同時多発テロからここ数年は、アルカイダの殉教を利用した自爆テロが横行している。人間の精神のよりどころである宗教に縛られ紛争を引き起こしている状況は、戦時中の日本と何等変わりが無い。

ホテル館と平和会館。その残された資料から、悲しみや潔さといった感傷ではなく、「遺書の行間を読み取る」ことが、せめてもの特攻隊員への供養である。そして二度と同じ過ちを繰り返してはならない教訓として、深く心に刻んでおくことが必要である。また、長崎では、多くの市民が犠牲になった長崎平和公園も訪れることが出来た。

九州は神話の世界であり、先の戦争の記憶が残る貴重な土地でもあった。この平和な時代に生きさせてもらったことを感謝しつつ福岡から厳寒の十勝へと九州六日間の紀行を無事終えた。